

論文

学習者言語が日本語学術共通語彙の理解に与える影響 —中国語母語、中朝バイリンガル、韓国語母語、非漢字圏の 学習者を比較して—

松下 達彦¹、佐藤 尚子²、笹尾 洋介³、田島 ますみ⁴、橋本 美香⁵

学術的文章に特徴的な語彙の約7割は漢語で、日常言語、文芸的文章等に特徴的な語彙とは異なり、特に非漢字圏の学習者にとって、学術的文章の理解は相対的に難度が高いと考えられる。本研究は日本語の学術共通語彙の理解が学習者言語（以下 LL）の背景によりどう異なるのかを明らかにするため、日本語学術共通語彙テスト Ver. 2.0 を、日本語を学習対象言語とする、日本、韓国、中国などの大学に在籍する学生等 229 名に実施し、ラッシュモデルを用いて中 (C)、中朝バイリンガル (KC)、韓 (K)、その他 (O) の四つの LL グループごとに項目難度を推定した。その結果、相対的項目難度は LL による顕著な違いが表れた。C にとって O より相対的に難度の高い項目は「サンプリング」「ビジュアル」など上位 4 項目がすべて外来語だったのに対し、O にとって C より相対的に難度の高い項目は「案件」「激増」など上位 22 項目中 20 語が漢語だった。LL グループ別項目難度の相関係数を計算すると、K と C の相関が $r=0.508$ だったのに対し、K と O では $r=0.615$ で、K は C より O に近く、必ずしも漢語系の学術語彙が韓国語知識で易くなるわけではないことが示唆された。また KC は K ($r=0.480$) よりも C ($r=0.666$) に近かった。高度バイリンガルを対象に含む研究・教育では各種施策の判断に際して、L1 だけでグルーピングすると実態を見誤るので注意が必要である。

キーワード：学術共通語彙、語種、漢字語、学習者言語、中朝バイリンガル

1. はじめに

日本に留学していれば、あるいは日本国外であっても大学で日本語を専攻していれば、通常、日本語で学術的文章を読み書きする必要があるが、それは簡単なことではない。その大きな原因の一つは学術系の語彙が難しいことである。学術的文章に特徴的な語彙の約7割は漢語であり、学習者が通常よく接するような日常会話、文芸書やドラマ・アニメなどに特徴的な語彙とは大きく異なる^{1,2}。特に非漢字圏の学習者にとって、学術的文章は日常的な文章より難しいであろう。

英語圏においても、学術的文章で使われる語彙には

ギリシャ語・ラテン語起源の語彙が多く、ゲルマン系の語彙が多い日常語とは異なっており、ギリシャ語・ラテン語起源の語彙の知識の壁 (lexical bar) が学力差の原因になっていると言われる^{3,4}。そのため、Academic Word List⁵が作成され、英語教育で幅広く活用されている。

本研究は、日本語の学術系語彙、特に「学術共通語彙」^{1,2,6}の学習・教育を改善するため、どのような背景の学習者にとって、どのような語種の語彙がどの程度難しいのかを明らかにすることを目的とする。

学術系語彙は多岐にわたるが、分野を問わず幅広く使われる語彙と、特定分野の語彙がある。特定分野の語彙はいわゆる専門語彙である。松下^{1,2}は、学術的文章に特徴的だが（非学術的文章での頻度が相対的に低い）異なる分野に共通の語彙として「学術共通語彙」「限定学術共通語彙」を挙げており、特定分野のみで

¹ 東京大学大学院総合文化研究科教授

² 千葉大学大学院国際学術研究院教授

³ 京都大学国際高等教育院准教授

⁴ 中央学院大学法学部教授

⁵ 川崎医科大学医学部准教授

使用される専門語彙と分けている^{註1}。これは、人文、社会、理工、生物・医学の4領域の専門的文章を対象に特徴語抽出を行い、抽出された語の重なり領域数に応じて4領域語から1領域語に分け、4領域語と3領域語を「学術共通語彙」と呼び、2領域語と1領域語を「限定学術領域語彙」と呼んでいるものである。そのいずれにおいても漢語の占める割合は高く、「学術共通語彙」2,591語の75%、「限定学術領域語彙」1,393語の69%が漢語である。非漢字圏学習者には漢字学習の負担が重い一方、漢字圏学習者にとっては学習者言語（以下LL、いわゆるL1=第一言語のみならず、高度な運用力を持つL2なども含める）^{註2}知識を利用して理解できる語が多いと予測され、一部にLL知識の干渉がありえるが、総じて言えば、有利であると予測できる。

学術系語彙の理解については、田島ほか^{7,8)}、佐藤ほか^{9,10,11)}が調べている。

田島ほか⁷⁾は日本の小学校4年生から中学校3年生まで、および大学生を対象に学術共通語彙の理解について調べており、学年が上がるにつれて得点が伸びるがその伸びは小学校高学年で大きいこと、大学では学校間に差があることなどを報告している。また、田島ほか⁸⁾は学術共通語彙テスト(JCAWT) Version 1の開発について説明し、3大学で1年生対象に実施した結果を報告している。興味深いのは、一般的な語彙量テストよりも語彙頻度との相関が低く、分野別の語彙頻度とテスト結果の順位相関を分析した結果、ネットフォーラムや文芸、次いで政治法律や経済商業と相関があり、哲学、歴史や科学技術、生物医学など他の分野とは有意な相関がなかったことである。頻度が高ければ理解のレベルが上がるという前提に立てば、これらの相関は大学生の接触頻度の高いジャンルを示していると考えられるとしている⁸⁾。

一方、佐藤ほか^{9,10,11)}はJCAWTを使って日本語を第二言語(以下L2)として学ぶ留学生等の学術共通語彙の理解度を調べている。佐藤ほか^{9,10)}では日韓共同理工系学部留学生事業で日本の国立大学の理工系学部に入学者の予定の学生たちが日本で受ける6カ月の予備教育(6大学で実施)の効果を検証する目的でJCAWT Version 1を使った調査を行い、予備教育の前

後での得点の比較や日本人学部生との比較を行っている。その結果、75点満点中、予備教育開始時にすでに日本の大学生レベルの知識に近い60点以上だった学生はあまり得点が伸びていないが、60点未満だった学生には大きな得点の伸びがあったこと⁹⁾、留学生が配置される予定の国立大学の日本人学生は平均が68.7点で、最低でも60点をとっていること¹⁰⁾などを報告している。また、佐藤ほか¹¹⁾ではJCAWT Version 2.3の文字版と音声版を中国人および韓国人の大学生対象に実施し、どちらも文字版に比べて音声版の得点が有意に低いが、分散分析の結果は中国人学生のほうが音声版の得点がより低く、交互作用が検出されたことを報告している。また、文字版と音声版の得点の相関は韓国人学生のほうが有意に高いとしている。これらは漢字語の多い学術系語彙において、LLの漢語知識が大きく影響し、その影響の度合いが中国人学生と韓国人学生で異なることを示しているといえよう。

しかし、これらの調査には非漢字圏の学生が含まれておらず、漢字語学習の負担については不明な点が多い。本稿では、非漢字圏の学生も対象に含め、学術共通語彙」が日本語を学習対象言語とする学習者にどの程度理解できるか、特に学術共通語彙の理解は、中国語L1、中朝バイリンガル(中国の朝鮮族の学生=朝鮮語L1だが中国語の読み書き・会話とも超上級レベル)、韓国語L1、その他(非漢字圏L1)といったLLグループによってどう異なるかを研究課題とする^{註3}。

2. 調査方法

2.1 テスト形式と対象語

調査に使用したのは、田島ほか⁷⁾と同じJCAWT Ver. 2.0である。ここで対象とする学術共通語彙^{1,2,6)}は、1.で述べたように一般的テキストと比較して学術テキストにおいてジャンルを問わず使用率の高い語彙であり、基本語彙と専門語彙の中間に位置し、学生・生徒にとっては基本語彙の次に重要な語彙である。「占める」「優れる」「当初」「減少」「強化」「取り上げる」など、範囲・関係・段階・量的変化・論述の展開といった、抽象性の高い論理操作に不可欠な語が多い。

対象語は、学術共通語彙リストの中の語から頻度順位に従って上位20,000語から250語に1語の割合で、

可能な限り等間隔で選定された75語である(付表参照)。ただし、旧日本語能力試験の4級および3級の語彙(高頻度の基本語彙)は除外されており、頻度順位1,251~20,000位の語から250語に1語の割合でサンプリングされている。Version 1では語彙頻度のみが統制され、漢字は統制されていなかったが、Version 2では、小中学生とも比較できるように、漢字の学年配当も現実の割合を反映するよう統制されている。すなわち、学年配当の基準を満たす語で、基準頻度順位に最も近い語が対象語として選定されている。

問題形式は、対象語を含む文や語句を示した上で、語義を問う3肢選択問題である。図1に問題形式のサンプル(実際の問題とは異なる)を示す。問題項目の語の意味を知っていれば選択肢の意味が理解できることを担保するため、選択肢の記述には基本的に初級語彙が用いられており、それでは記述できない場合のみ、対象語よりも頻度の高い語の一部に用いられている^{註4}。これにより測定領域を語の基本義の理解にできるだけ限定し、統語機能や文脈的知識など、語彙知識の他の側面を排除することを意図していると考えられる。

テスト実施にあたっては順序効果を避けるため、乱数を使って問題をランダムに配置した2バージョンを作成した。各バージョンの問題の質に差はなく⁷⁾、すなわち練習効果や疲労効果がないということである。

2.2 テスト参加者

テストに参加したのは、日本語を学習対象とする、日本、韓国、中国などの大学生等229名である。参加者のL1は中国語、韓国語/朝鮮語のほか、スウェーデン語、英語、ドイツ語、イタリア語、フランス語、フィン語、ロシア語、アラビア語、ベトナム語、モンゴル語など、計23種類に及ぶ。LLグループ別および大学種別の参加者数を表1、表2に示す。

融和：市民の融和

- 1) 行ったり来たりすること
- 2) 数が多くなること
- 3) 仲がよくなること

図1 JCAWT 2.0 問題例

表1 LLグループ、国内/国外別参加者数

LLグループ	日本国内	日本国外	総計
中国語 C	11	41	52
韓国語 K	8	96	104
朝鮮語/中国語 KC		16	16
その他(非漢字圏) O	37	20	57
総計	56	173	229

表2 大学種別、国内/国外別参加者数

	日本国内	日本国外	計
日本・国立大	14		14
日本・国立大	15		15
日本・国立大	14		14
日本・私立大	10		10
日本・日本語学校	3		3
中国国立大		57	57
韓国私立大		96	96
スウェーデン公立大		20	20
計	56	173	229

性別は、女性74名、男性135名、未記入20名で、平均年齢は20歳8か月、標準偏差2歳1か月(年齢未記入13名除く)である^{註5}。

2.3 テスト実施方法

テストを実施したのは2017年4月から11月にかけてである。主に参加者の所属校で、A4版の紙に問題を印刷し、解答はマークシート方式で、制限時間30分で実施した。表紙で文字により、問題数、時間配分などのほか、「こうかもしれないと思う答えがあるときは答えてください。ぜんぜんわからないときは答えなくてもいいです。」と教示を与えた。

3. 結果と考察

3.1 結果の概要

75点満点中、平均は48.2(64.3%)、標準偏差16.0(21.3%)で、最高71(94.7%)最低0(0%)であった。クロンバック α は.95で、テストの信頼性(内的一貫性)は高かった。図2に得点率範囲別の度数分布を示す。

各問題項目の正答率と項目頻度の相関(ρ :スピアマンの順位相関)は.261($p<.05$)で、これは日本の大学生(日本語L1)を対象にした田島ほか⁸⁾と類似している。田島ほか⁸⁾では、正答率と政治法律の語彙頻度との相関(ρ)が.257で、経済商業との相関が.249(い

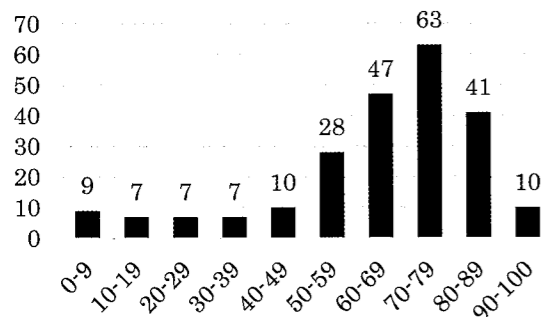


図2 JCAWT 2.0 得点率範囲別度数分布

ずれも $p < .05$) である。本研究は日本語が L1 ではないが、理解の度合いと語彙頻度との関係は日本語 L1 と類似している。

3. 2 LL グループによる相対的項目難度の違い

LL グループによる得点パタンの違いを明らかにするため、ラッシュ分析により、受験者全体および LL 各々の項目難度の推定を行った^{注6}。ラッシュ分析とは客観的な測定具が必然的に従うべき数理モデル (ラッシュモデル) との適合度を統計的に分析する方法である。ここで示される項目難度は受験者グループごとの語種別の相対的な難度であることに留意する必要がある。各グループの中でどの語種が相対的に難しいかを示し

表3 中国語 L1 にとって非漢字圏 L1 より相対的項目難度が高い項目 (項目難度差 1 以上)

C: 中国語 L1 K: 韓国語 L1
KC: 中朝バイリンガル O: その他 (非漢字圏) L1
*配列は C と O の差の大きい順。ID は 75 項目中の頻度順位。数値の単位はロジット (logit) で表記^{注7}。

ID	項目	語種	全体	C	K	KC	O
68	サンプリング	外	1.11	1.90	1.31	2.67	-1.10
53	ビジュアル	外	-0.55	1.37	-2.96	-0.59	-1.24
37	コンテンツ	外	0.67	1.90	0.25	2.18	-0.57
25	ギャップ	外	-0.37	0.87	-1.21	1.16	-1.37
6	作り出す	和	-0.28	0.23	0.03	0.88	-1.95
69	描画	漢	0.01	0.95	-0.09	0.61	-1.10
36	教示	漢	0.96	0.69	1.75	1.79	-1.24
18	前面	漢	0.04	0.95	-0.27	0.88	-0.84
44	境目	和	1.09	1.71	1.05	2.67	-0.05
43	コマンド	外	-0.31	0.33	-0.72	2.67	-1.24
4	しばしば	和	1.64	2.51	1.71	0.61	0.95
22	少量	漢	0.45	1.29	0.19	0.61	-0.18
30	議事	漢	0.01	0.52	0.14	-0.25	-0.57
47	近接	漢	-0.34	0.61	-1.62	1.46	-0.44
平均 (n=14)			0.30	1.13	-0.03	1.24	-0.78
標準偏差			0.67	0.65	1.26	1.01	0.69

ているため、例えばグループ A の漢語の項目難度が和語より高く、グループ B にとって和語の項目難度が漢語より高いとしても、グループ A の漢語の正答率がグループ B より低いことを意味しない。ただし、難度を示す数値ロジット (logit)^{注7} は間隔尺度上で表現されており、グループ間で相互に比較可能なため、受験者能力とは独立して、各グループにおける各語種の相対的な難度およびその差を比較することができ、その程度も比較可能であるという点において他の分析手法より優れている。

分析の結果、LL グループによる相対的項目難度には顕著な違いが表れた。

3. 2. 1 外来語の相対的難度が高い中国語 L1 と中朝バイリンガル

まず中国語 L1 (表中の C) にとって、非漢字圏 L1 (表中の O) よりも相対的項目難度が高い項目 (項目難度差 1 以上) を表 3 に示す。

表 3 の「サンプリング」「ビジュアル」など上位 4 項目がすべて外来語であり、これらの項目は中国語 L1

表4 非漢字圏 L1 にとって中国語 L1 より相対的項目難度が高い項目 (項目難度差 1 以上) (記号の意味は表 3 を参照)

ID	項目	語種	全体	C	K	KC	O
48	案件	漢	-0.20	-2.88	0.09	-2.29	0.65
56	激増	漢	-1.16	-4.10	-1.10	-0.98	-0.70
66	拙稿	漢	1.24	-0.47	1.80	0.88	2.60
16	重点	漢	-1.68	-4.10	-1.99	-1.49	-1.24
23	立法	漢	-0.88	-2.16	-1.79	-0.59	0.50
67	兼任	漢	0.40	-1.17	0.55	0.61	1.45
75	円錐	漢	1.22	-0.09	1.66	0.61	2.31
10	先進	漢	-1.85	-2.88	-2.96	-3.56	-0.97
63	脱税	漢	-0.58	-2.16	-0.15	-0.98	-0.44
64	勝訴	漢	-0.64	-1.73	-0.80	-0.25	-0.05
52	論述	漢	-0.74	-1.73	-0.72	-1.49	-0.18
19	同等	漢	0.16	-1.17	0.69	-0.59	0.36
51	粗	漢	0.61	-0.78	1.27	-0.98	0.65
49	座標	漢	-0.31	-0.47	-0.99	-0.98	0.95
13	深める	和	-0.09	-1.42	0.30	0.33	-0.05
21	交付	漢	1.20	0.33	1.89	-0.98	1.64
32	害する	混	-0.58	-1.73	-0.15	-2.29	-0.44
57	躍進	漢	0.09	-0.61	0.35	-0.98	0.65
17	曲線	漢	-0.61	-1.42	-0.80	0.33	-0.18
39	適格	漢	-0.71	-1.73	-0.41	-0.25	-0.57
35	能動	漢	-0.74	-0.78	-1.79	0.05	0.36
34	賛同	漢	0.31	0.02	0.25	-0.59	1.11
平均 (n=22)			-0.25	-1.51	-0.22	-0.75	0.38
標準偏差			0.83	1.17	1.25	1.04	0.98

にとって非漢字圏 L1 より相対的に高難度だということが言える。「相対的に」ということは、中国語 L1 に対する項目難度が非漢字圏 L1 に対する項目難度より高かったとしても、正答率そのものが中国語 L1 のほうが低いとは限らないということである。表 3 に登場する漢字語は「前面」「少量」の 2 語を除き、すべて現代中国語にない語である。「前面」「少量」がこの表に表れたのは非漢字圏 L1 にとって相対的難度が高くないことの影響と考えられる。中国語 L1 学習者が学術的文章を読むには学術系の外来語の学習や教育がより効果的であるということが言えるであろう。

また、表 3 の項目難度の平均を見ると、中朝バイリンガル (中国の朝鮮族大学生) は、1.24 で、中国語 L1 の 1.13 よりも高く、韓国語 L1 や非漢字圏 L1 に比べて、「サンプリング」「コマンド」「コンテンツ」といった外来語が相対的に苦手なようである。「作り出す」「教示」といった中国語知識では正解しにくい語の相対的難度も高いため中国語 L1 に近い面があると言えようである。

3. 2. 2 漢語の相対的難度が高い非漢字圏 L1 と低い中朝バイリンガル、中国語 L1

表 4 は非漢字圏 L1 にとって中国語 L1 より相対的項目難度が高い項目 (項目難度差 1 以上) である。「案件」「激増」など、上位 11 項目のうち 10 項目は中国語に存在するいわゆる同形漢語 (「円」・「圓」のような対応字体は同形とする) であり、これらの語は中国語 L1 にとって容易である分、非漢字圏 L1 にとっては相対的に難度の高い語となる。「脱税」は中国語では〈逃税〉だが、「脱」と〈逃〉は意味が似ており、中国語 L1 には「脱税」の意味も類推できる可能性が高いであろう。このことから、非漢字圏 L1 学習者が学術的文章を読むには、学術系の漢語や漢語系接辞の学習・教育が相対的により重要で効果的だと言える。

また、表 4 の項目難度の平均を見ると、中朝バイリンガル (中国の朝鮮族大学生) は、-0.75 で、中国語 L1 の -1.51 よりも高いが、韓国語 L1 の -0.22 や非漢字圏 L1 の 0.38 よりも低く、中国語の漢字知識による有利な面があると考えられる。

3. 2. 3 韓国語 L1 の非漢字圏 L1 への近似

表 5 は LL グループ別項目難度の相関係数 r である。

表 5 LL グループ別項目難度の相関係数 (r)
n=229 (記号の意味は表 3 を参照)

	全体	C	KC	K	O
全体	--	0.751	0.621	0.751	0.722
C	0.751	--	0.666	0.508	0.337
KC	0.621	0.666	--	0.480	0.192
K	0.751	0.508	0.480	--	0.615
O	0.722	0.337	0.192	0.615	--

韓国語 L1 と中国語 L1 の相関が 0.508 であるのに対し、韓国語 L1 と非漢字圏 L1 の相関は 0.615 となっており、学術共通語彙知識に関して、韓国語 L1 は中国語 L1 より非漢字圏 L1 に近いといえるであろう。つまり、韓国語 L1 にとって、必ずしも漢語系学術語彙は易しいとは言えないということである。これは佐藤ほか¹¹⁾において、L1 知識の漢字語理解への影響が韓国語 L1 より中国語 L1 のほうが大きいという結果とも一致している。

従来、中国と韓国の学習者は漢字圏学習者とグループ化されることが多かったように思われるが、中国語 L1 と韓国語 L1 は学術系語彙知識の理解度の傾向において相当に異なると思われるべきである。

3. 2. 4 中朝バイリンガルの中国語 L1 への近似

中朝バイリンガル (中国の朝鮮族大学生) は、韓国語 L1 との間の項目難度の相関が 0.480 であるのに対し、中国語 L1 との間の相関は 0.666 なので、韓国語 L1 より中国語 L1 に近いといえるであろう。中国語知識が漢語系学術語彙の理解に使えるためだと思われる。

このことはまた、いわゆる高度バイリンガルの学習者に関しては L1 だけで一つのグループにしてしまうと実態を見誤る可能性を示している。

4. まとめと今後の課題

中国語 L1 にとって、外来語や中国語にない漢語などは、非漢字圏 L1 より相対的に高難度である一方、非漢字圏 L1 にとって、いわゆる同形漢語は中国語 L1 より相対的に高難度である。また、韓国語 L1 は中国語 L1 より非漢字圏 L1 に近く、韓国語 L1 にとって漢語系学術語彙は易しいとは限らない。中国語 L1 と韓国語 L1 を漢字圏としてグループ化することは、漢語系語彙の理解に関しては誤っていると考えられる。中朝バイリンガル (中国の朝鮮族大学生) は韓国語 L1 よ

り中国語 L1 に近く、中国語知識が漢語系学術語彙の理解に使える。高度バイリンガルを対象に含む研究・教育では各種施策の判断に際して、L1 だけでグルーピングすると実態を見誤るので、注意が必要である。

クラス分けや教授上の学習者への対応において、漢字圏・非漢字圏といった単純な区別によって判断をするケースがあるとすれば、それには慎重であらねばならないと思われる。

今後の課題としては、語のタイプや LL をさらに精緻に分類することが考えられよう。LL 知識は学習対象語と同義であれば有利に働くが、異なっている場合は干渉にもなりえる。同形語か非同形語か、同形の場合は同義か類義か異義かといった違いが中国語 L1 や韓国語 L1 には影響すると思われる。

また、近年、ベトナム語 L1 の日本語学習者が増えているが、今回、ベトナム語 L1 は 2 名しかいなかったため、いわゆる漢越語（中国語起源のベトナム語単語）の学術語彙理解への影響を調べることはできなかった。今後の課題としたい。

学術語彙知識の発達が学術的文章の読解力とどの程度、どのように関係しているのか、ひいては一般的学力とどう関係するのかといった点も興味深い。学術共通語彙理解の発達が産出を含めた語彙知識の全体的な習得にどうつながっているのかといった点も十分に解明されてはいない。これらの点も今後の課題である。

付記：本研究は 2018 年日本語教育国際研究大会・第 22 回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウムでの口頭発表（2018 年 8 月 4 日、ヴェネツィア・カフオスカリ大学）に基づくものである。なお、本研究は日本学術振興会（JSPS）科研費、JP15K02631、JP18K00679 の助成を受けた。

注

注 1 札幌は「日常語に使用される語彙と専門用語との間に位置する専門分野を超えた学術的な語彙」の存在とその重要性を指摘しており¹²⁾、水本は類似の語彙を「基礎専門語」と呼んでいる¹³⁾。類似の語彙を抽出した試みには角¹⁴⁾、バトラー後藤¹⁵⁾があるが、目的や方法がそれぞれ異なっているので、ここでは松下の「学術共通語彙」を取り上げる。

注 2 本稿でいう学習者言語 (LL) は、一般に言う第一言語 (L1) に近いが、本稿では、特に L1 に近いレベルで L2 言語運用力をもつ高度バイリンガルについて論じるため、学習者が日常的に高いレベルで運用できる言語を学習者言語 (LL) と総称し、第一言語 (L1) のみに限定できる場合にのみ第一言語 (L1) という語を用いることとする。

注 3 なお、本研究は佐藤ほか¹⁶⁾の公開よりも前に行われた研究であり、研究課題設定時には同研究は参照していない。音声知識も興味深いですが、まずは読んで理解できることが肝要であると考え、本研究では、文字による語彙知識について調査した。

注 4 選択肢の意味理解を担保するために第一言語訳で意味記述する方法もあるが、異なる言語での記述の意味が同じであることを担保することが難しいことに加え、参加者の第一言語も多岐にわたり、平等に第一言語訳を用意することが難しいという事情もあり、平易な日本語を用いるほうが直接比較しやすいと考えた。また、本研究では各項目の絶対的な難度の比較ではなく、母語別に見た相対的な難度を取り上げており、難しすぎる場合に解答を避けても、基本的に結果に影響しない方法をとっている。

注 5 テスト参加者の一般的な日本語運用力のレベルについては、今回実施したテストのほか別に別のテストを実施していないので不明だが、参考文献 9), 10), 11) などによれば、30 点 (得点率 40%) 程度までが初級であり、その上の 60 点 (得点率 80%) 程度までが中級で、60 点以上が上級 (日本語によって一般的な大学で学習できるレベル) であると考えられ、これに従えば、229 名中、約 30 名が初級、148 名程度が中級、51 名が上級であったと考えられる。

注 6 使用ソフトウェアは Winsteps 3.92.1 である。

注 7 ロジット (logit) とは「log-odds unit (of success)」を縮約した呼び方であり、ラッシュ分析における項目難度および受験者能力の推定値を表す単位である。項目難度の平均値を便宜的に 0 とし、それより大きい値は難しい項目、それより小さい値は易しい項目を意味する。なお、この数値は、間隔尺度上で解釈が可能である。つまり、たとえば、項目難度 0 と 1 の難度の差と、項目難度-2 と-3 の難度の差は等しいということになる。

参考文献

1) 松下達彦：コーパス出現頻度から見た語彙シラバス，森篤嗣編：ニーズを踏まえた語彙シラバス，くろしお出版，

pp.53-77 (2016)

- 2) Matsushita, T.: In what order should learners learn Japanese vocabulary? A corpus-based approach. Ph.D. dissertation, Victoria University of Wellington (2012), <http://researcharchive.vuw.ac.nz/xmlui/handle/10063/4476>
- 3) Corson, D. J.: The Lexical Bar. Pergamon Press (1985)
- 4) Corson, D. J.: The Learning and Use of Academic English Words. Language Learning, Vol. 47, No.4, pp.671-718 (1997)
- 5) Coxhead, A.: A new academic word list. TESOL Quarterly, Vol.34, No.2, pp.213-238 (2000)
- 6) 松下達彦：日本語学術共通語彙リスト，<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html#jcaw> (2020 年 8 月 18 日参照)
- 7) 田島ますみ・佐藤尚子・松下達彦・笹尾洋介・橋本美香：日本語学術共通語彙知識の発達（義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較），日本リメディアル教育学会第 13 回全国大会発表予稿集，pp.140-141 (2017)
- 8) 田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介：日本語学術共通語彙テストの開発，中央学院大学「人間・自然論叢」，第 45 号，pp.19-31 (2018)
- 9) 佐藤尚子・松下達彦・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：日韓共同理工系学部留学生予備教育における韓国人学習

者の日本語学術共通語彙の習得 — 日本での予備教育の効果の検証—，千葉大学国際教養学研究，第 3 号，pp.37-43 (2019)

- 10) 佐藤尚子・松下達彦・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：学術共通語彙知識の獲得 — 国立大学に入学する韓国人学習者を例として—，千葉大学国際教養学研究，第 4 号，pp.55-65 (2020)
- 11) 佐藤尚子・松下達彦・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：学術共通語彙に関する音声知識と文字知識の違い — 中国語および韓国語を第一言語とする日本語学習者に焦点を当てて—，第 22 回専門日本語教育学会研究討論会誌，pp.26-27 (2020)
- 12) 札幌野寛子・深澤のぞみ：理工系学生を対象とした実験・研究に必要な日本語指導のための語彙表現研究 — 「科学技術基礎日本語」教材開発に向けて—，平成 7 年度日本語教育学会春季大会予稿集，pp.186-191 (1995)
- 13) 水本光美・池田隆介：導入教育における「基礎専門語」の重要性-環境工学系留学生のための語彙調査と分析から，専門日本語教育研究，第 5 号，pp.21-28 (2003)
- 14) 角知行：学術基本用語集作成の試み，アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル，第 2 号，pp.11-21 (2010)
- 15) バトラー後藤裕子：小中学生のための日本語学習語リスト (試案)，母語・継承語・バイリンガル教育研究，第 6 号，pp.42-58 (2010)

付表 JCAWT 2.0 の問題項目 (頻度順)

1	学	11	集合	21	交付	31	周波	41	散布	51	粗	61	厳然	71	勅令
2	本来	12	記号	22	少量	32	害する	42	永続	52	論述	62	るつぼ	72	耐用
3	分野	13	深める	23	立法	33	耕作	43	コマンド	53	ビジュアル	63	脱税	73	腐食
4	しばしば	14	おのおの	24	類型	34	賛同	44	境目	54	可否	64	勝訴	74	凸
5	思考	15	配分	25	ギャップ	35	能動	45	具現	55	編著	65	融和	75	円錐
6	作り出す	16	重点	26	関数	36	教示	46	基底	56	激増	66	拙稿		
7	用語	17	曲線	27	極度	37	コンテンツ	47	近接	57	躍進	67	兼任		
8	強力	18	前面	28	共生	38	絶え間	48	案件	58	割り振る	68	サンプリング		
9	主な	19	同等	29	助成	39	適格	49	座標	59	下巻	69	描画		
10	先進	20	要約	30	議事	40	計測	50	並列	60	廃	70	既		

How Do Learner Languages Affect Understanding of Japanese Common Academic Words? Comparing Chinese L1, Korean-Chinese Bilingual, Korean L1, and Non-kanji Background Learners

MATSUSHITA, Tatsuhiko¹ SATO, Naoko² SASAO, Yosuke³

TAJIMA, Masumi⁴ HASHIMOTO, Mika⁵

¹Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo

²Graduate School of Global and Transdisciplinary Studies, Chiba University

³Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

⁴Faculty of Law, Chuo Gakuin University

⁵School of Medicine, Kawasaki Medical School

About 70% of the domain-specific words in Japanese academic texts are of Chinese-origin. Since they are considerably different from the domain-specific words in everyday language and literary texts, comprehension of Japanese academic texts is thought to be particularly difficult for non-kanji background learners. In order to clarify how learner language (LL) background affects understanding of Japanese Common Academic Words, a Japanese Common Academic Word Test Version 2.0 was conducted for 229 students learning Japanese as a target language while enrolled in either Japanese, Korean, or Chinese universities. Using the Rasch model, DIF analysis was performed for the four LL groups of Chinese (C), Korean-Chinese bilingual (KC), Korean (K), and others (O). Results showed that the relative item difficulty was significantly different depending on the LL. The top four items that were relatively more difficult for C than for O were all Western-origin words such as “*sampuringu*” (sampling) and “*bijuaru*” (visual), while 20 items among the top 22 items that were relatively more difficult for O than for C were all Chinese-origin words such as “*anken*” (matter) and “*gekizotū*” (sudden increase). Calculating the correlation coefficient (r) of item difficulty for each LL group, the correlation between K and C was .508, while the correlation between K and O was .615. K seems to be more similar to O than C; that is, the Chinese-origin academic words do not seem to be always easy for K even with the knowledge of the Korean language. Also, KC was more similar to C ($r=.666$) than K ($r=.480$). When making policies in research and education involving advanced bilinguals, caution must be taken since grouping by L1 alone may lead to misunderstanding the actual situation.

keywords: Japanese Common Academic Words, word origin, kanji vocabulary, learner language, Korean-Chinese bilingual